

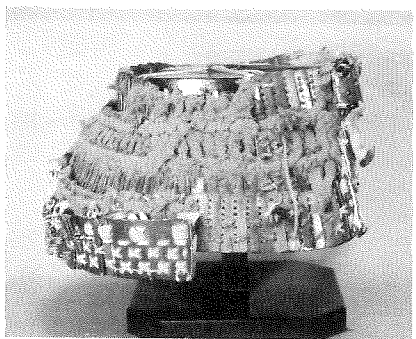
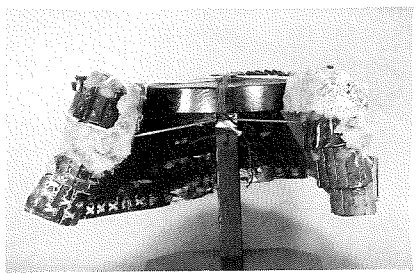
御嶽神社宝物シリーズ3

国宝・赤糸威大鎧の古い鞆しころ

日本風俗史学会会員 齋藤 慎一
青梅市文化財保護審議会委員

赤糸威大鎧が明治三六年の 当時の小札・小札の組み方・大修理で、現在の姿になった 威糸・吹返しふきかえしの旧状が残る点時、兜についていた五段の である。

鞆こまねははずして、全く新しい 古い鞆にのこる古い小札は鞆にかえた。古い方の鞆は、 鉢付板で三三枚・二の板で四欠損部分を生漆塗りの革小札 六枚・三の板で五三枚・四の板で四〇枚・菱縫板で二〇枚この鎧を好んで二度も上覧し である。復元した新しい鞆はた八代將軍吉宗の修理した黒 鉢付板から、それぞれ五六い厚紙部分もそのまま残る。 枚・六一枚・六六枚・七一だが、この鞆がこの上な 枚・五〇枚である。無論すべて貴重なのは、平安時代製作 革小札で、下地なしに塗つ



上は、正面からみた古い鞆。向って左の吹返の上端に櫛鳥糸と裾金物の足の穴がみえる。下は向って左側からみた古い鞆。最下段の板は徳川吉宗の修理か。
- 青梅市郷土博物館提供 -

た古い黒漆は堅牢で、平安時代の作技の優秀さを伝える。鞆の小札は、下辺が幅広く、長さは短い。この古い小札で、上幅3・15cm・下幅3・7cm、長さは胴小札の7・7cmより1・5cm程短く、6・2cm程である。

松平定信編の集古十種の図より傷みは進んで、小札板も切れ、二個残った鉢付板も今手側につかわれている。

鉢付板で小札九枚分返つた吹返には退化した牡丹襷に籠目状の霰地に龍の盤ばん(円)の絵の絵革が残るが、小縁も伏組もなく南北朝時代ごろ修理の絵革だと思われる。

この鞆は、鉢の腰巻に二つずつ四箇所あけた穴に革紐でとめ、更に三箇所の穴に、鉢付鉄の二本あて三箇所で六本の中のそれぞれ一本ずつ二本でとめられていたのである。

吹返の小札の端から二枚

目に据金物の足の穴が残り、金物の旧位置を示す。更に耳糸みみいとの櫛鳥糸の組紐が、白・縹・紺の色が判明する程度の糸屑状で残る。また四の板には別種の櫛鳥糸が二箇所残っている。現在の赤糸威大鎧の耳糸・畷目糸は全部新しい櫛鳥糸だから、唯一残る古い威糸として貴重である。

古い威糸は胴に残るものが一二畷の組紐で、鞆の方は十畷と組み方に相違がある点検討を要す(甲冑師西岡文夫氏の観察)。また鉢付板の小札が通常のように七穴二行(一四穴)の四つ目札でなく、並札(一三穴)であるため威糸が、下に重さなる小札の頭を越して縄目となる点は現在残る唯一の特殊な古式の手法である。

このように種々の注目すべき特徴を持っているこの鞆は日本甲冑史上きわめて貴重な遺例なのである。

第二十二回武蔵御嶽神社

新年奉納俳句入選作品集

奉納式 平成七年二月十一日
選者 来住野 臥丘

特選

- 一席 初日待つその昂奮の渦の中 入 間滝沢スエ子
- 二席 分校なし誰が手袋か木に掛かり 青 梅野村春子
- 三席 冬桜おしえてよりの道連れに 日 野鈴木とみゑ
- 四席 冬葎滝へ通じる道すがら 青 梅田中郷路
- 五席 去年今年見えぬ扉を通り来し 羽 村横手タマエ

秀逸 (順不同)

- 初雀木の葉のごとく枝に群れ 青 梅原島康典
- 改札の列に居て買う初土産 入 間中島美都里
- 寒林やリスが見せたる獣の目 奥多摩村木緑翠
- たらの芽の太く息吹ける寒日和 入 間高山耳風
- 神の域までを鶴に付き添われ 入 間篠崎桂香
- 歎ありて人見ず御師の冬菜畑 入 間増岡蛭雪
- 神杉に雪つぶして雪散らす 秋 川大野絢子
- 岩茸の反りて大岩冬早 青 梅持田佐智子
- 初日の出ピアスきらりと光りけり 青 梅土方環
- ここかしこ初日捉えし朴落葉 青 梅佐久間玄寿

選者吟

寒ざくら満開のときなく終る

臥丘

奉納俳句選評

◎日の出を待つ気持ちは日常の日の出と違って初日となると興奮の伴うのも当然である。その興奮も作者一人でなく御嶽神社の神域又は日の出山などになると数えきれぬ多くの人が同じ気持ちで待つので、目には見えない興奮の渦が大河・大漁に湧く波の渦のように互に感じ合うのである。(興奮の渦)が力強い。

◎(分校なし)と上五で言い切り、曾てあつた分校の影も形もないことに驚きと軽い寂寥感を出し、続いて木の枝にかかっていた手袋に目を移し誰の落した物か或いは分校の取り壊しに使った軍手であつたのか、いづれにしても無くなつた分校と、其処に或る手袋を詠み、有無の対比により印象をより鮮明にしたものである。

◎冬桜は寒桜とも言ひ冬の寒い季節に咲く桜である。御嶽神社の参道に沿うて三本あるのを憶えている。一本は分校のあつた所の土手に他は、神代樺迄の道に沿うた土手に二本。この三本は参道に沿うて見える所なので誰もが知っているが、見えぬ山中にあるかどうかは知らない。花は小さく数も春咲く桜より少ないようで、花季が長く満開の時も知らず終るようである。俳句を作る人の眼は貪欲で見えている。上掲作品の句意は平易で誰にもわかる句で、下五の(道連れ)により楽しい作になつた。

◎冬葎は冬紅熟する野生の葎で、冬から春にかけて果実屋に出る大きな温室の葎ではない。(滝へ通じる)の滝は七代の滝であろう。句意は前掲の(冬桜)の句と同じように平易で軽いものであるが小さな楽しみが伺える。

◎(去年今年)は去年と今年の境であるが、俳句では行く年迎う年に当って、行く年を回顧し、新しい年への感情が多く詠まれている。(見えぬ扉)は門扉であつて人の出入口にある扉である。眼では見えないが、ここを通つてはならぬと知る心の扉である。その扉を通つて来たと言うのは、喩えば病後まだ日も浅く強い運動や労働は医師から止められており作者自身もよくわかつていながら運動会に出たり登山をしたりしてしまつたと言うのであろう(通り来し)と言つていうのは今年もまた通ろうと言つてはなく、今年もまた通ろうと、悔悟の情を含めて詠んだ作である。扉はとびら扇はおおき、日本語はむずかしいものである。

◎御嶽山のケーブルのようである。年の初めの土産だからどうしても買わなければならぬ。観光地だと窓の下へ売手が来る。

◎都の林務課に勤めていた玄寿さんには御嶽の風目はお手のものもである。二十二回の奉納俳句に毎年出句し毎年入選しているのはおそらく玄寿さんだけではないでしょう。今年も玄寿さんに射す初日を詠んでいる。俳句に詠む対象や、素材が無いなどとわ言わせないで、と言っているようだ。